

『ローマ人の物語』

塩野七生著／新潮社

『コンスタンティノーブルの陥落』

塩野七生著／新潮社

『竜馬がゆく』

司馬遼太郎著／文藝春秋

『坂の上の雲』

司馬遼太郎著／文藝春秋

別に就職活動のテクニックのノウハウ本の事では無い（そういう本も役には立つが、付け焼き刃だと採用担当者にウンザリされる）。採用試験が進んで面接の段階になると、「大学時代に読んで印象に残った本は何ですか」という質問を受けることは大いに想定される。そのときの回答として：

「本はあまり読みませんでした」（……論外）

「太宰治の走れメロスです」（中学生かよ）

「僕は友達が少ない、です。」（ここでライトノベルを出すか）

「クラム・ハモンド・ヘンドリクソンの有機化学です。」（ウヘッ、マジか、こいつ○○○○か）

などでは、採用担当者に良い印象は与えられないだろう。やはり採用担当者に『ほう、やるな』と思わせるような本を読んでおきたい。

採用担当者をびびらせる5399ページ耐久読書

『ローマ人の物語』

ハードカバーで15巻、文庫本で43巻。読み切っていれば自慢して良い。塩野七生氏は中高年（会社の重役クラスの年齢）に最も受けが良い作家の一人なので冒頭のような質問をする採用担当者ならばこの作品の名前を知ってはいると思われるが、読み切った人間は少ないかもしれない。ちなみに筆者の研究室の学生はこれまでに3名が読了している。

文字通り「ローマ人」の物語でローマ建国から、王政時代、共和政時代、帝政時代、と続き、キリスト教の国教化や東西分裂、西ローマ帝国の消滅は駆け足で通り過ぎ、6世紀の東ローマ皇帝ユスチニアヌスによるローマ征服（奪還？）をもって物語が終わる。当然、ポエニ戦争、ユリウス・カエサル（シーザー）、アントニウスと

クレオパトラ、アウグストゥス、五賢帝といった世界史の教科書で見た事項や人物について、たっぷりとページを使って記述されている。その他、膨大な数の人間が登場し、とても名前が覚えきれない、と思うかもしれないが、大丈夫。登場する頻度と重要性には強い相関があるので、重要人物であればイヤでも頭に残る。

冒頭の質問に対しこの本の名前を挙げると、次に来る質問は当然「どういう所が印象的でしたか（≒本当に読んだのか?）」となる。数え切れないほど有るが、筆者ならば以下の四点あたりを答えるだろう：

- 1) 第二次ポエニ戦争でカルタゴの将軍ハンニバルが戦象部隊を率いてアルプス越えを敢行し、イタリア半島に侵入してローマの軍団を撃破しながらも、本国に呼び戻されてザマの戦いでローマのスキピオ・アフリカヌスに敗れるまでが非常にドラマチックでした。
- 2) ユリウス・カエサルの人、政治家そして人間としてのキャラクターが非常に魅力的で、まさに英雄というのはこういう人間のことを謂うのだと思いました（著者の塩野七生氏が歴史上最も愛している人物なのだから、そのように記述されるのも致し方ないが）。
- 3) アウグストゥスの所を読んで、カエサルと比べると地味ながらも、大国を安定的に統治するのに必要な政治家の資質とはなんと高度で複雑なものか、と戦慄しました。そして長寿もまた重要な資質です。
- 4) ローマ法の考え方として、「新しい法律を制定したとき、その内容に古い法律と整合性がとれないところがあった場合には新しい方の法律を優先する（法の改正はしない）」、という話が再三書かれており、これは非常に合理的であり、大帝國を統治するためにどうしても必要だったのだらうと思いました。

英単語で歴史を意味するhistoryはhis-storyの事だとされている。確かに歴史は物語だと思う。

上の本はどうしてもしんどい、という向きには

『コンスタンティノーブルの陥落』

この本は252ページほどの作品で、文章のレベル（面白さとか難しさとか）は『ロー

マ人の物語』と変わらないが、それほど時間をかけずに読み通すことができるだろう(この本も筆者の研究室で流行った)。冒頭の質問に対しては『『コンスタンティノーブルの陥落』です。『ローマ人の物語』を読みたかったのですが、あまりにも大部なので、とりあえずコンスタンティノーブルから読んでみました。』と答えてみるか。

西暦395年、帝国は東西に分裂し、476年西ローマ帝国が消滅する。一方、コンスタンティノーブル(現イスタンブール)に都する東ローマ帝国は以後千年近く命脈を保つことになる。

本書には東ローマ帝国の勢力の消長を示す図版が掲載されている。上に書いたようにユスチニアヌス帝によりローマ(東ローマ帝国)は一度は地中海を己の内海として取り戻したかに見えたが、それも長くは保たず、次第に領土を蚕食され、滅亡の年1453年にはコンスタンティノーブルの町一つとペロポネソス半島の一部およびエーゲ海のいくつかの島以外は周り全てをオスマントルコ帝国によって押さえられて切ないほど小さくなっており、加えてオスマン帝国の首都はバルカン半島内陸部(つまりコンスタンティノーブルから見てヨーロッパ側)のアドリアノーポリ(現エディルネ)に置かれているという状態になっていた(ちなみにこの年はイタリアのルネッサンス期にあたる)。そしてオスマントルコの若きスルタン、マホメッド2世の「あの街をください」という言葉から、コンスタンティノーブルの攻防戦が始まる。

オスマントルコ側の侵攻の気配に対しコンスタンティノーブル側も手をこまねいていたわけでは無く、皇帝自らフィレンツェに赴いて援軍を要請するなど外交努力を続けていたが、キリスト教国側の動きは鈍く、コンスタンティノーブルに対する海と陸からの攻撃が始まってしまう。

コンスタンティノーブルはバルカン半島の東の角に位置し、南がマルモラ海、東がボスフォロス海峡、北が金角湾と三方を海に囲まれた小さな半島、というか岬の上に都市が建設されている。幅が数百メートルの幅しかない金角湾の入り口には鋼鉄の鎖が渡され敵の艦船の侵入を防ぎ、内陸側の半島の付け根では深く広い堀と3重の防壁を持つテオドシウスの城壁が敵兵の侵入を拒んでいた。当初ト

ルコ側は戦艦を陸に揚げ山越えをさせて金角湾に侵入させたり、坑道を掘って城壁内に侵入を試みたりするも効果が上がらず、千年の都たるコンスタンティノープルを攻めあぐねていたが、やがて兵力に物を言わせた力攻めの中、防御側に生じた綻びにつけ込み城壁内への侵入に成功する。落城を悟った最後の東ローマ皇帝コンスタンチヌス11世は真紅のマントを脱ぎ捨て、衣についていた皇帝の印をはぎ取ると、剣を抜いてトルコ兵の中へ突入していったとされる（まるで映画みたいだ）。

戦争である以上、殺し合いはあるが、それでものんびりした面もあったようだ。戦闘中にヨーロッパ側の補給船がコンスタンティノープルに入れたり、落城の最終局面でも脱出船が市民を乗せてヨーロッパ側に逃れたり、また、捕虜となり奴隷とされても身代金を払えば自由民に戻れているようで、凄惨な皆殺しではなかったことに少しほっとする。

面接での「どういう所が印象的でしたか」に対する回答例としては；

- 1) 西ヨーロッパがいわゆる中世の暗黒時代を経験しているときに、変容しているとはいえ古代ローマから連なる帝国が千年も命脈を保ったこと、
- 2) 東ローマ皇帝の最期の様子、
- 3) 西方のキリスト教国の動きが政治的な思惑やキリスト教の宗派の問題（カソリックとギリシャ正教）と相まって非常に鈍いこと、といったところか。

学会でこの町を訪れ、テオドシウスの城壁に登ったとき、城壁から見下ろす東ローマ帝国兵と見上げるオスマントルコ兵の戦（おのの）きやトルコ側から発射される大砲の轟音を想像し当時の恐怖を思った。

現代人が持っている坂本竜馬のイメージの原点

『竜馬がゆく』

留年して、自分は社会に出てやっつけられるのでしょうか、と自信を失った学生が筆者の研究室に来た。休みがちな学生で心配したが、筆者の所では読書を推奨しておりその学生もその影響で本を読み始めた。就職活動中、冒頭の質問に「竜馬がゆく、です」と答えたところ、「難しいの読んでいるね」と言われ内定をもらえた。

これで自信を回復したようで研究も順調に進み、B4の秋には学会にも参加して、ややヒヤヒヤさせられたものの無事卒業していった。

戦国時代、土佐（高知県）には戦国大名の長宗我部氏が居たが関ヶ原で西軍に付いたため国を召し上げられ、その後には山内氏が大名として入った。同時に山内氏の家臣達も土佐入りしたわけだが、前から居た旧長宗我部氏の家臣達がどこかへ去っていた訳では無い。結局、山内氏の家臣は上士、旧長宗我部氏の家臣は下士（郷士）となり、凄まじい身分差別が幕末まで続くことになった。坂本竜馬は下士出身でその理不尽な差別の中で育った。

竜馬は少年時代はあまり利発ではなかったとして描かれている。やがて剣術の才能が認められ、生家が裕福だったこともあり、剣術修行のため江戸へ下る。江戸で桂小五郎、勝海舟など色々な人に出会い、また黒船来襲にも居合わせる。二度目の江戸遊学から土佐に戻った後、時代が急速に動き出す中、脱藩を執行し所謂志士となる。しかし他の志士が議論や武力闘争に走るのに対し、竜馬は経済こそが近代化への道だと考え、商社亀山社中を起こし、犬猿の仲だった薩摩と長州を経済力（つまり金の力）を使って同盟にまで持ち込む。その他、次の時代の青写真となる船中八策を書いたり、大政奉還の成立に尽力したり、教科書の明治維新の頁で見るとかなりの数の項目にこの人物が関わっている。その人となりは男性にとっても女性にとっても非常に魅力的な人物だったらしい。人間、生まれて来たからにはこれくらい縦横無尽に暴れてみたいものだと思う。最後に志し半ばで暗殺者の剣に倒れるが、それもまたドラマチックだ。

竜馬が登場する小説やマンガは数多あるが、それらの原点となっているのがこの作品だろう。筆者は高校時代に父の本棚にあったハードカバー版でこれを読み、感動し興奮したが、当時この感動を共有してくれる者が周りにはおらず残念な思いをした事をおぼえている。

我々の父祖達は常に一所懸命だった

『坂の上の雲』

司馬遼太郎氏も中高年に受けの良い作家の一人であり、その作品群の中でも本

作の評価は特に高いので、冒頭の質問に対し、この作品の名前を答えれば、担当者がノッてくれる確率は高いだろう。

少し前にNHKが数年かけてこれを原作とするドラマを放送した。概ねよくできたドラマだったと思う。ドラマが放送されていた頃、研究室の学生に、視ておいた方が良さぞ、と勧めたところ、何名か視た学生が居て「視て良かったです」というので、今度は原作を勧めておいたらハマっていた。ゼミの合間に「広瀬少佐は今どこにおいでか」「少佐は閉塞作戦において戦死されました」などという会話（互いに読書の進捗状況を比較している）が飛び交ったのが懐かしい（広瀬少佐については本書を読むか広瀬武夫で検索してみしてほしい）。

ストーリーは、日本陸軍の騎兵を育て、日露戦争でロシアのコサック騎兵を破ったとされる秋山好古、その弟で、連合艦隊参謀として日本海海戦を戦った秋山真之、同郷の友人で日本の近代文学確立に貢献した正岡子規の3名を軸として進行するが、本作品の真の主人公は明治の日本という国だと思う。日本人にとって日本国内だけで事足りていた江戸時代が終わり、帝国主義まっただ中の世界で海千山千の列強と渡り合わなければならなくなった明治時代、近代化を急ぎ、富国強兵を進め、西欧列強が自分たちに都合良く決めたルールを律儀に守りながら歩む我が国の姿は「健気」という表現が一番ぴたりするかもしれない。

物語は、上記三人の生い立ちから始まり、日清戦争、三国干渉、北清事変、日英同盟、と日本が遭遇する“対外的なイベント”が駆け足で描かれ、全体の1/3を過ぎたあたりから日露戦争に突入し、ぎりぎりのところで日本が勝利して終わる。日露開戦が避けられない状況となる中、明治の人々が国を守るために世界中を奔走する姿やその過程での外交上の駆け引き（明治の政治家はこんなに優秀で、明治政府は諜報活動もできたのか）には感心するし、旅順要塞攻略戦（所謂「二百三高地」）、奉天会戦、日本海海戦での日本軍の奮戦には悲壮感を抱くとともに胸が熱くなる（戦いを望んでいないにもかかわらず、強大な敵と戦わねばならなくなり、覚悟を決めて全力を尽くして戦い、大きな傷を負いながらも、最後に辛うじて勝利する、という日本人の大好きなドラマのパターンの原型だよな）。葉の「ラッパのマークの正露丸」のマークがなぜラッパなのか、正露丸の名前の由来は何なの

か調べてみると面白いだろう。

ただ、いくつか首をかしげる部分もある。著者の司馬遼太郎氏の歴史観では、明治期の日本は立派だったが、氏自身が兵士として参加した大東亜戦争の頃の日本は“良くない日本”だったということになっているらしく、所々にそのようなバイアスを感じる記述がある。また、乃木希典司令官と伊地知幸介参謀長が兵を無駄に損耗する頭の固い無能な指揮官だった、という評価は本作で定着したとされているが、最近その評価には疑問が呈されている。当然のことながら本作は歴史書ではなく「小説」であるから、そのようなこともあるだろう。

日露戦争で勝利してしまったがために日本は調子に乗り、勝てるはずの無い大東亜戦争を引き起こして戦争の惨禍をまき散らした、とする言説がある。冗談では無い。負けていれば良かったとでもいうのか。負けていればロシア帝国は確実に朝鮮半島南端まで進出し、我が国は九州か北海道の割譲を要求されていたであろう（或いは国ごと併呑されたか）。あの当時、日本人は日本という国（家族、同胞、郷土、文化、歴史……）を守るために持てる限りの知恵を絞り全力を尽くしたことは間違いない。その後の歴史の進路に関しては結果論に過ぎない。そんな議論よりも、我々は、我々自身が卑怯者の子孫でも、臆病者の子孫でも、愚か者の子孫でも無いことをこの本から知るべきだ。

執筆者紹介

内田 希

物質材料工学専攻准教授。専門領域は、無機化学、計算機化学、熱化学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『ローマ人の物語 [全15巻]』 塩野七生著 新潮社 1992-2006年 2,484-3,672円
『コンスタンティノープルの陥落』 塩野七生著 新潮社 1983年 2,160円
『竜馬がゆく 新装版 [全8巻]』 司馬遼太郎著 文藝春秋（文春文庫）1998年 各702円
『坂の上の雲 新装版 [全8巻]』 司馬遼太郎著 文藝春秋（文春文庫）1999年 各702円

[ブックガイド目次へ](#)